

## アメリカ国立公文書館(NARA)から見たラストボロフ事件

進藤翔太郎

### (1)はじめに

#### 発表テーマ

##### ラストボロフ事件

- ・ 在日ソ連代表部 2 等書記官のユリ・ラストボロフが 1954 年 1 月 24 日にアメリカ当局に対して亡命申請を行い、日本国内で多数の日本人エージェントを用いて諜報活動を行っていた事件。ラストボロフは亡命後、在日ソ連代表部を通じたソ連諜報活動の実態を暴露し、その内容の一部がアメリカ当局を通して日本政府に通報された。

#### 日本側一次史料

- ・ 警視庁公安部『外事警察資料昭和 44 年 4 月ラストボロフ事件・総括』

##### ①日暮信則

##### ②庄司宏

##### ③大村英之助

##### ④清川勇吉

##### ⑤志位正二

##### ⑥田村敏雄

##### ⑦菅原道太郎

##### ⑧石山正三

##### ⑨吉野松夫

- ・ 橋本武彦

- ・ 園田重雄

- ・ 丸山直行

##### ⑩保刈偉夫

##### ⑪ジョン・ミルトン・バイングトン

##### ⑫ガストン・ジャンムジャン

##### ⑬滝柳精一

##### ⑭飯沢重一

##### ⑮麓多禎

##### ⑯高毛礼茂

- ・ 遊佐上治

##### ⑰泉顕蔵

##### ⑱渡辺三樹夫

①9大隅道春

②0大沢金蔵

②1中尾正就

②2ユージン・アクションフ

②3坂田二郎

②4平島一郎

②5朝枝繁春

②6淡徳三郎

②7都倉栄二

②8花井京之助

②9正木五郎

③0細川直知

③1古沢洋左

③2郡掬夫

③3斎藤金弥

③4柳田秀隆

③5吉川猛

③6深井英一

アメリカ国立公文書館(NARA)史料

・史料公開背景

・ the Nazi War Crimes Disclosure Act(1998 年)

・ the Japanese Imperial Government Records Act(2000 年)

・ Interagency Working Group (IWG)

・ レコードグループ

・ RG319 IRR Personal Name Files, 1939-1976 (以下、RG319 個人ファイル)

・ RG319 IRR Case Files: Impersonal Files 1940-1976

→Project STITCH

・ ラストボロフ事件関係者ファイル

Folder RASTVOROV Yuriy A., Box627, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder SHOJI Hroshi, Box722, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II  
→警視庁②

Folder HIGURASHI Nibunori, Box289, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁①  
Folder TAMURA Toshio, Box776, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁⑥  
Folder SHII Masaji, Box716, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁⑤  
Folder HOSOKAWA Naonori, Box315, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁⑩  
Folder KORI Kikuo, Box425, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁⑫  
Folder HIRASHIMA Ichiro, Box291, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁⑭  
Folder TOKUSABURO Dan, Box798, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁⑯  
Folder ASAEDA Shigeharu, Box23, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁⑰  
Folder YOSHINO Matsuo, Box877, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁⑱  
Folder YANAGIDA Hidetake, Box871, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁⑳  
Folder TAKIYANAGI Seiichi, Box774, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁㉓  
Folder NORIO Sawada, Box567, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁なし  
Folder SHIGERU Takamore, Box716, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁㉖  
Folder SAKATA Jiro, Box659, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁㉘  
Folder OSUMI Michiharu, Box588, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II →警視庁㉙

(→以下、RG319 個人ファイルの特定の個人のファイル (フォルダー) は RG319 志位正二ファイル のように表記する)

ラストボロフ事件に間接的に関与している個人ファイル

Folder TANEMURA Sako, Box777, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder ABE Koichi, Box1, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

## (2) RG319 ラストボロフファイル

### ①ラストボロフ亡命とイギリス

1954年2月4日付文書

Subject: RASTVOROV, Yuriy A., USSR Citizens, Third Secretary, Political Group of the Former Soviet Mission

- ・1950 年後半、東京都千代田区にあるアメリカ陸軍教育センター(the Army Education Center)に勤める教員の、Maude Lillian Burriss(原文ママ)がラストボロフから接触を受け、ラストボロフから英語教師になってほしいという依頼を受ける
  - ・Maude Lillian Burriss は CIC の John Davis 陸軍少尉に相談し、CIC の監視・指導の下でラストボロフへの英語指導を始める
  - ・1954 年 1 月 22 日、ソ連代表部 3 等書記官の Nosenko から、当日中にモスクワに戻るよう伝えられる
  - ・ラストボロフは突然の決定に抵抗し、帰国後は投獄されるものと判断
  - ・帰国日は 1954 年 1 月 25 日まで延長される
  - ・1954 年 1 月 23 日、ラストボロフは東京ローンテニスクラブに会費を払いに訪れる。その際に R.L.G Challis というニュージーランド在日代理公使から接触を受け、亡命を打診される
  - ・R.L.G Challis はソ連代表部が 1954 年 1 月 18 日に英領香港経由の通過ビザを要請していること、及び、イギリスがラストボロフの亡命に強い関心を示していることを伝える
  - ・ラストボロフは R.L.G Challis の説得に応じ、立川空軍基地のロイヤルエアフォースに連れていかれるも、イギリス側の対応に不信感を覚え、イギリス当局への亡命を拒否
  - ・結局、悪天候のため離陸できずに、ラストボロフは立川空軍基地を離れる
  - ・ラストボロフによれば、当時ソ連代表部が有していた情報によると、R.L.G Challis はイギリス情報部将校であったという
  - ・ラストボロフはイギリス情報部に身をゆだねると、自身の身柄とソ連に拘束されているイギリス人の身柄を交換されてしまうと判断していた
  - ・イギリスに対して不信感を抱いていたラストボロフは Maude Lillian Burriss にアメリカ当局への政治亡命の手配を頼む
  - ・Maude Lillian Burriss から情報を受けた 441CIC 支隊は DRS(Document Research Section)に連絡し、CIC と DRS は共同でラストボロフ亡命を実行する
- NHK ドキュメンタリー「スパイラストボロフ 40 年目の証言」
- ・「このゲームを続けられるのは 2, 3 日しかないと感じた。イギリスにいるソ連のスパイが私の情報をモスクワに送るからだ」
- ピーター・ライト (久保田誠一監訳)『スパイキャッチャー』 朝日新聞社、1987 年、393-395 頁
- ・「英海軍情報局(NID)は 1953 年秋にラストボロフと接触し、彼の亡命について交渉を始めた。ラストボロフは結局、こちらに来ることに合意したが、英国に行くよりは、オーストラリアのような英植民地 (!) に直接向かうという条件をつけてきた。彼は英国に行くことを嫌う理由として、英情報機関にソ連のスパイがもぐり込んでいることをあげたが、それ以上詳しいことは言わなかった。

英海軍情報局は、この KGB の男を英空軍輸送指令部の飛行機で、東京からシンガポ

ールに運ぶ手配をした。そこで、彼を MI5 と MI6 の合同編成の極東安全情報局(SIFE)に引き渡すつもりだった。ラストボロフにはこの計画は伝えられなかった。しかし、不運にも飛行機が滑走路の端まで行ったときに、吹雪が東京を襲い離陸は不可能になった。そして、吹雪が収まるのを待っている間に、乗組員の話から、この飛行機がオーストラリアではなくシンガポールに向かうことがラストボロフにわかってしまった。彼は恐れをなし飛行機から逃げ出して、ただちにアメリカ大使館に駆け込み米国へ亡命してしまった。

その後しばらくして、CIA はラストボロフが英情報機関にソ連のスパイが浸透していると信じた理由についてより詳しく説明したと報告してきた。それによると、彼の友人のスクリプキンが、1946年に極東で英側と接触し亡命を求めたことがあった。スクリプキンはモスクワに帰り、次に外国へ出る機会に妻と一緒に亡命する手はずを決めた。しかし、モスクワに戻ったスクリプキンはなぜか KGB に見破られてしまった。彼は MI6 職員を装った二人の KGB 職員の接触を受けた。彼は告白し裁判にかけられ銃殺刑に処せられた。

われわれが資料部でスクリプキンについて調べてみると、彼のファイルが見つかった。極東の英下記軍情報局からの二つの報告書のコピーも入っていた。1946年5月と7月の日付で、スクリプキンの亡命計画に関するものだった。(略)このファイルは F 局次長のロジャー・ホリスと一人の若い局員が処理した。」

→但し、ラストボロフ個人ファイルには、イギリス情報部内にソ連スパイがいたこと、及び、ラストボロフが提供したというスクリプキン事件に関する情報は全く書かれていない

## ②CIC と DRS(CIA)の関係

1953年9月15日付文書

### Possible Soviet Subject for Defection

- ・アメリカの生活様式に関心を示し、ソ連には戻らないことを明言していると指摘
- ・ラストボロフが潜在的な亡命者であるとしている
- ・ラストボロフがソ連代表部と在日米軍人を結ぶコンタクトマン(contact man)である
- ・今後のラストボロフへのアプローチに関する計画について DRS に 441CIC 支隊と協力させるべきだとしている

→C・A・ウィロビー『知られざる日本占領—ウィロビー回顧録—』 番町書房、1973年  
「1949年には当時の CIA(中央情報局)長官だったビーデル・スミス大将の要請により、執務室の数室を CIA 極東地区担当者たちに提供している。CIA の連中は現在でもどこの国でも同じことだが、決して CIA を自ら名乗りはしない。彼らは DRS(資料調査局)と称していた。」

1954年2月7日付文書

Subject: CIC Exploitation of RASTVOROV, Yuriy A.

- ・CIC と DRS が共同で東京および沖縄でラストボロフに対する最初の尋問を行っている
- ・米軍(陸海空)のセキュリティに関する責任はCICが負うべきとしている
- ・一方で、ラストボロフから得られた情報の戦略的かつ長期的な側面は第一義的にDRSの責任であるとしている

③「ラストボロフの寂しい死」

・ *The Washington Post*, January 15, 2006

→・2004年死亡 享年82歳

- ・ラストボロフ事件後のラストボロフの置かれた状況に関する記事

(2)各日本人ソ連エージェント

①志位正二(陸軍少佐在奉天第3方面軍情報主任)

・RG319 個人ファイル(志位正二ファイル)あり (警視庁公安部作成供述調書現物含む)

→NYKビル尋問、G-2地理課及び外務省勤務、ラストボロフ事件

- ・1948年11月1日舞鶴に帰還
- ・1948年11月下旬から49年1月20日までNYKビルで尋問を受ける
- ・1948年4月カラガンダ市第20収容所では通訳・労働監督を担当
- ・1948年4月25日対ソ協力誓約署名

私、西正二((注)西正二はソ連によって与えられたコードネーム)は、ソ連内務省の所属機関に対して協力いたします。この誓約に違反するような場合には、ソ連の刑法に基づいていかなる処罰を受けても差し支えありません。

1948年4月25日

- ・帰国後の行動に関するソ連側からの注意事項
  - 1)日本共産党には加入しない。また、日本共産党といかなる接触を持つてはいけない
  - 2)復員局の人間と交際してはいけない
  - 3)連合国の人間と交際してはいけない
  - 4)ソ連大使館員とは接触してはならない
- ・CICに対する誓約署名  
私は良心に従い、真実を話し、何も隠し事は致しません。私は自分の意志で以下のことを誓います。
  1. 帰国後私はソ連政府のいかなる代表者とも連絡を持っていません
  2. 現在私はソ連政府のいかなる機関とも関係を有していません
  3. 私は、ソ連政府のいかなる機関とも関係を持たないことを誓います

もし接触を受けた場合には、地元のアメリカ情報機関に速やかに報告を行います  
4. 1948年4月26日、カラガンダ第99-20収容所に抑留されている間、ソ連政府に  
協力する誓約を行いました。しかし、帰国後の指令は一切与えられていません

- ・1948年11月1日 CIC 舞鶴ポートチーム
  - ・1949年2月-53年2月まで地理課都市計画班に勤務
- G-2 地理課 (Geographic Section) 都市計画班 (Town Plan Division)

- ・NYKビル(千代田区郵船ビル)内に置かれていた
- ・ソ連、中共、朝鮮半島の情報図の作成
  - ・旧日本軍の作戦地図または空中写真を基礎としてその都市の素図を作り、さらに、ソ連地区の引揚者を尋問して目標を記入し情報図を完成させる
- ・班としては約180のソ連都市、30の中共都市に関する情報図を作成
- ・一時期には35人の旧日本軍人が勤務し、その大半が旧日本軍で情報活動に従事
  - 前川国雄(陸軍第13飛行士団参謀)、藤田薫(歩兵第23連隊大尉)、完倉聿郎(軍務局軍務課員少佐)、井田正孝(軍務局課員中佐)、江口利夫(参謀本部第10課員中佐)、水谷勝人(第77師団参謀)の他、軍歴は不明であるが伊藤誠一、片山伐太郎、中田義勝、松田正純、菅間正など

例)志位正二の場合

- ・1949年2月-53年2月まで地理課都市計画班に勤務
- ・志位はハバロフスク、ニコライエフスク、大連、旅順を担当
  - ・ソ連代表部ラストボロフへの情報提供(他に菅原道太郎)
- ・1953年11月外務省アジア局第2課勤務
  - ←G-2 地理課勤務の森山直光とアメリカ空軍情報部勤務の矢部忠太らによる斡旋
- ・1954年2月5日ラストボロフ亡命を受け警視庁に自首

②田村敏雄(満州国滨江省次長)

- ・RG319個人ファイルあり
- ラストボロフ亡命後作成史料 供述の一部英訳含む
- ・経歴
  - ・1925年東京帝大経済学部卒業
  - ・1932年7月満州国滨江省次長
    - 9月満州国民生部教育司長→大同学院教授、大連関税長官などを歴任
  - ・終戦後抑留→抑留中対ソ協力誓約
  - ・1950年1月帰国
  - ・1951年~54年2月までラストボロフと連絡し情報提供
  - ・1960年宏池会事務局長

・RG319 田村敏雄ファイル

- ・ 抑留中は民主グループのリーダー
- ・ 抑留中の対ソ協力誓約と合言葉
  - ・ ソ連：「あなたにお金を借りていた九州の友達がよろしくと言っていた」
  - 田村：「それは返さなくてよい」
- ・ ラストボロフ事件時の供述の一部英訳あり
  - ・ ソ連代表部への度重なる無心と借金←早稲田大学理事の森伝との事業費
- ・ 1955年6月7日報告からは、ラストボロフからの情報により CIC が田村を当初、ソ連代表部と東久瀨宮グループを結ぶコードネーム：「プロフェッサー・シムラ」なる人物とみて調べていたことが伺える(B-2)

Cf.RG319 ラストボロフファイル

- ・ 田村のもたらず情報は低いと判断され、1953年4月からは接触が行われていなかった

・RG319 阿部幸一ファイル

- ・ CIC は抑留帰還者である阿部幸一を用いて、田村に関する以下の情報を収集
- ・ 1952年3月6日文書
  - ・ 帰国後、同窓の池田勇人蔵相を訪問し、スーツ一式と5万円を受け取る
  - ・ 田村は世界政府協会という組織を設立し、組織の機関紙「世界政府」の発行に携わる→機関紙のイデオロギーは共産主義に近いとの情報
  - ・ 日本国内で共産主義を広めようとしているソ連人からの金銭的援助の可能性を指摘

→CICによる阿部を潜在的ソ連エージェント(PSA)であることを示す阿部幸一ファイルはDRS(CIA)に移送されている(1952年7月4日文書)

→富田武『シベリア抑留者たちの戦後—冷戦下の世論と運動 1945-56年』人文書院、2013年、183-185頁

- ・ 秋草俊指揮下のハルビン憲兵隊本部通訳
- ・ 1927年OGPUによってリクルートされた
- ・ 戦前は、日本協力者とそのソ連側諸組織に対する工作、ソ連領内における諜報活動、日本防諜機関に尾行されたソ連人に関する情報をソ連側に提供
- ・ 抑留中、ソ連側インフォーマント
- ・ 中東鉄道売却交渉における阿部情報によってソ連側は満州国側の低価格見積もりを事前に知り得て交渉を有利に進むことができた

③細川直知(陸軍中佐第3軍参謀長)

- ・ RG319 個人ファイルあり
- ・ RG319 ラストボロフファイルには ZED double agent との記載あり



→ZED double agent は米国側のダブルエージェントを指すものと思われる  
→RG319 ラストボロフファイル中に ZED double agent の記載がある者は、細川の他は  
ISHIDO Sukemitsu、古沢洋左、朝枝繁春 の 3 名  
→但し、ISHIDO Sukemitsu は警視庁公安部『外事警察資料昭和 44 年 4 月ラストボロフ事件・総括』には登場せず

- ・ 1950 年 1 月 22 日帰国
- ・ 帰国後 NYK ビルにて抑留中の自身の行動についての尋問を受ける(尋問自体は 1951 年 2 月まで続く)
- ・ 対ソ協力誓約は帰国を理由に署名
- ・ CIC に対してソ連側から接触を受けた場合には即座に米軍当局に知らせる旨の誓約を行う
  - 実際にソ連側から接触を受け、1951 年から 1953 年の夏まで約 2 年間ソ連側との連絡を行い、月に 5-6 万ほどをソ連側から受取り、情報提供を行う
  - CIC(JSOB)の監視・指導の下に行われる
- ・ ラストボロフ亡命後、米側からの情報提供を基に作成された警視庁公安部『外事警察資料昭和 44 年 4 月 ラストボロフ事件・総括』昭和 44 年には、細川に関する記述はあるものの、CIC のダブルエージェントとして活動していたことは記述されていない

#### ④朝枝繁春 (大本営参謀本部付陸軍中佐)

- ・ RG319 個人ファイルあり
- ・ RG319 ラストボロフ個人ファイルには、「朝枝に関する短いファイルは、朝枝が ZED に引き継がれる前に CIC ファイルにふくまれている」という記述があるため、アメリカ側のダブルエージェントであった可能性が高い
  - RG319 朝枝繁春ファイルには該当の記述なし
  - 柴山太『日本再軍備への道 1945~1954 年』 ミネルヴァ書房、2010 年、310 頁  
「朝枝繁春元陸軍中佐(当時 GHQ の二重スパイ)が GHQ に伝えたところによれば、八月一日の共産党幹部との会話で、「高山」(日本帰還者同盟副議長の高山秀夫と思われる)と呼ばれる幹部がソ連からの帰還者による共産党への忠誠は信用できるとし、同党の武装蜂起を示唆していたという」
    - RG331 SCAP, Economic & Scientific Section, Miscellaneous Records 1945 to 1952, Box1
- ・ RG319 朝枝繁春ファイルに含まれているのは、ラストボロフ事件発覚後(1954 年 12 月 21 日以降)に作成された史料であり、主に朝枝の戦後(1954 年 12 月 10 日)の東南アジアにおける活動に注意が置かれている
- ・ 警視庁公安部『外事警察資料昭和 44 年 4 月ラストボロフ事件・総括』

「朝枝は大本営参謀本部付陸軍中佐で昭和20年8月19日ソ連軍によって逮捕抑留された。

彼はソ連側から数回取り調べを受けているうちソ連側の意図を察し帰国したい一心から諜報誓約を行い、帰国のシグナル(合図)、埋没などの訓練を受けて昭和24年8月7日引揚げた。

引揚げ直後、教育されたとおり東京世田谷の松陰神社の石燈籠に記号を書き、同月12日には都内の墓場から5万円を掘り出し、昭和27年5月19日日本橋の“丸善”2階で見知らぬソ連人から次回連絡についての指示を受けたがその後の連絡は行われなかった。」

「誓約後の諜報訓練

朝枝は誓約後昭和24年3月14日キリロフ中佐により、南樺太豊原のソ連極東情報本部に連行され、3月18日から4月13日の間に政治思想の改造教育を受けたほか、

○諜報活動方法

○機密情報を無電で送るときに用いる暗号

○東京における無電操作補助者との連絡方法

○秘密通信の隠匿および連絡場所

○必要があつて無電技師と連絡する場合の新聞広告、郵便による通信方法

などについても教育訓練を受けた」

→酷似したケースに種村佐孝の場合

Cf. 種村佐孝 (参謀本部第20班(戦争指導)班長)

→NYKビル尋問、キャノン機関、50年代後半に及ぶアメリカの注意

・1950年1月21日帰還

・1950年7月21日、種村は東京のNYKビルにて第441CIC支隊から約1週間に渡り日系2世米軍人トヨダから尋問を受ける

→米軍への受け答えは極めて協力的でソ連の為に帰国後の秘密工作員となったことを自白

・ハバロフスクにて対ソ協力誓約の署名と写真撮影

・ソ連側から種村に与えられた指令

- 1)「日本におけるアメリカ軍の組織、その部隊の規模、指揮者の名前、軍隊の構成、組織、部隊名、などをできるだけ詳細に」
- 2)「日本が再軍備された場合、現行憲法との関係にはどのような影響を与えるか。また、日本軍の構成、組織、部隊名等に関する情報」
- 3)「日米両軍の対ソ作戦計画に関する重要事項 とりわけそれに関する地域、日付、展開される規模(陸海空)」
- 4)「軍事作戦の準備のための軍事備蓄品に関する情報(南朝鮮も含む)」

- 5) 「日本国内で生産される軍事物資に関する情報 型や性能など」
- 6) 「対ソ情報員で日米の重要人物に関する情報および対ソ情報機関の構成について。  
また、ソ連との戦争の為にどのようなプロパガンダが行われているか」

・帰国後の行動に関するソ連側からの注意事項

- 1) 「これらの指令を実行に移すため、東京でアメリカもしくは日本の政府機関で職を得られるよう尽力すること。必要であれば新しい軍隊に入ること。」
- 2) 「報告の際には、日米の政府機関の公的な書類を確保するよう最善を尽くすこと。もしできない場合であっても、信頼できる情報源からの話や政府機関の資料から得られたような確かな情報を提供すること」
- 3) 「自身の任務、接触方法、連絡方法は一切他言しないこと。もしした場合には、厳重な処罰を与える」
- 4) 「指令を実行するにあたって、帰国後 6 万 5 千円を種村に与え、東京での新たな活動や住居のための費用として使う」

→1950 年 3 月 21 日付 CIC ウィロビー宛報告

- ・ソ連情報機関から日本国内での諜報活動に関する指令を与えられた際、東京都目黒区にある碑文谷公園内の巖島神社境内のキノコ型の灯籠付近に埋められた、日本円 6 万 5 千円が入った小包を地中から掘り出すようにと指令を与えられた。この小包は実際に 1950 年 3 月 11 日、種村自身の手によって掘り出されており、報告書には実際の当該小包内の紙幣の写った写真が入っている。この小包は 3 月 17 日に本郷ハウスに持ち込まれ、ジャック・キャノン (Jack Y. Cannon) 陸軍少佐と Mr.Mitsui および Captain Richards によって調べられた

- ・1952 年 10 月 6 日付 CIC 報告では Project DIGGER(DRAIN) の下で、種村に関するファイルの要約が作成されている

→Project STITCH 以外の抑留帰還者に対する講和条約以後の米軍の作戦の存在

- ・種村も朝枝同様、暗号訓練、機密情報の伝達方法についての訓練を受けている
- ・帰国後にソ連代表部から密使が派遣される前提で抑留中、帰国後の工作活動の打ち合わせが行われている
- ・1958 年 2 月在日米国大使館の在日米軍(G-2)宛のビザ許可についての問い合わせ  
→在日米軍(G-2)は種村が抑留中に共産主義的運動に参加し帰国後の対ソ誓約を行っていたと報告したうえで、抑留中の対ソ協力誓約は帰国のために行ったものであるとし種村の訪米を許可してもかまわないと報告

⑤沢田孝夫 (海軍少佐、在モスクワ大使館付武官)

- ・RG319 個人ファイルあり→ラストボロフ事件容疑者とある
- ・RG319 ラストボロフ個人ファイルからは、ソ連代表部内ソ連内務省(MVD)グループが活用していた日本人エージェントの内、ソ連内務省が最も重視していたものとして終

戦時在モスクワ日本大使館にいた日本人グループ(外務省職員：日暮信則、朝日新聞：清川勇吉、毎日新聞：渡辺三樹夫、外務省職員：庄司宏、海軍将校：沢田孝夫)とコードネーム：エコノミストの高毛礼茂であることが分かる

→但し、警視庁公安部『外事警察資料昭和 44 年 4 月ラストボロフ事件・総括』には沢田孝夫の名前は一切出てこない

・RG319 村山六郎ファイルには、公安調査庁を情報源とした報告書が含まれている

Cf・村山六郎（陸軍大尉：樺太特務機関）

- ・1947 年 8 月 3 日舞鶴に引揚
- ・1951 年 10 月 8-20 日にかけて、米情報機関から尋問を受け、自身がソ連エージェントとして工作任務を帯びていることを自白
- ・1954 年 10 月、前北方軍参謀長(Chief of Staff of the former Northern Army Headquarters)萩三郎の推薦を通して、自衛隊の幹部候補試験を受ける
- ・1955 年 1 月 8 日、自衛隊の北海道部隊に配属され、真駒内第 181 等連隊(Ordinary 18th Regiment)の第 2 大隊(2nd Battalion)の司令官(Commander of Headquarters)になる

・報告書①

- ・タイトルは「陸上自衛隊 (JGSDF)陸佐 (Captain)村山六郎)」
- ・「1957 年の Project Diamond 活動の概要を参照」とあるから、50 年代後半には Project STITCH ではなく、Project Diamond という米軍情報機関の別のプロジェクトによってソ連日本人エージェントの摘発・作戦の監視が行われていたことが伺える
- ・また、シベリア抑留エージェント(ラストボロフ事件関係者含む)に対する監視・調査において講和条約以後もアメリカ情報機関(CIC)との協力関係が垣間見える

以下はその報告書に書かれている内容

「公安調査局 (PSIB)は今現在、北海道札幌市真駒内に配置されている陸上自衛隊 (JGSDF)普通科中隊長(Infantry Company Commander)の村山六郎陸佐と、北海道総務部長の澤田孝夫(注：正確には沢田孝夫であるため以下は沢田と表記)について調査を行っている。沢田の前職は北海道庁民生部課長である。両者はソ連の諜報エージェントの疑いがある。本部局のファイルチェックによれば、村山六郎は 1949 年から 1952 年まで Far East Liaison Det(Sapporo)に使用されていた。また、村山は萩三郎元少将のネットワークの一員であった。沢田に関しては、公安調査局 (PSIB)の報告によると、先の大戦では海軍で少佐の階級を持ち、モスクワの日本大使館の駐在武官であった。戦争の終結で日本に引

揚げ、それ以降北海道庁で民生部の課長として勤めて来た。沢田もまた萩三郎ネットワークの一員であった。イシダ(公安調査庁：PSIA)が強く信じるころでは、萩三郎少将とのつながりのある米陸軍の情報活動に関する情報の大半は、ラストボロフを通じて、モスクワに提供された。沢田の名前はラストボロフによって明らかにされている。」

・報告書②

・情報源：北海道公安調査庁 (PSIA)イシダ ツネジロウ

・情報の日付：1956年12月3日

「情報源の報告によると、最近公安調査局 (PSIB)はソ連の諜報エージェントの疑いのある陸上自衛隊 (JGSDF)普通科中隊長(Company Comander, Infantry)の村山六郎陸佐と面会した。村山が明らかにしたところによると、村山は札幌の米軍情報機関に雇われていた間、ソ連領域に浸透させるため多くの日本国民の訓練に指導者として当たっていたという。こうした訓練は、北海道札幌市東本願寺で行われていた。情報源の考えでは、もし村山の話が本当であるとするならば、こうした活動のすべてが萩少佐のネットワークに報告され、また沢田孝夫を通してラストボロフに連絡されていた、そして、こうした理由でアメリカの浸透エージェントの大半が目的地に上陸するとすぐに捕まった。

注意書き(Note)：北海道札幌市真駒内陸上自衛隊 (JGSDF)普通科中隊長は1949年から1952年まで札幌市の Far East Liaison Det に使用されていた。前萩少佐ネットワーク(ラストボロフ)の一員である」

・高山信武『服部卓四郎と辻政信』芙蓉書房、1980年、232-233頁

「マッカーサー司令部の指導によって、河辺機関なるものがつくられた。これは終戦時の参謀次長であった河辺虎四郎中将を長とし、終戦時の陸相阿南大将のあとを受けて帝国陸軍大臣となった下村定大将、終戦時の参謀本部第2部長有末清三中将、それに私(辰巳栄一)の4名が中心となっていた。全国を5地区に区分し、各地域に責任者を置いた。即ち北海道は萩三郎少将、東京周辺は高島辰彦少将、近畿地区は木村松次郎中将、中国地区甲谷悦雄大佐、九州地区芳仲和太郎中將等である。この機関の任務は、終戦時における各地方の治安状況を調査するとともに、とくにシベリア方面からの引揚者による共産化活動や対ソ情報の収集等、当時の国内治安維持のための情報活動が主体であった。」

⑥中尾将就 (北支派遣軍参謀分部囑託(ロシア人工作))

・警視庁公安部『外事警察資料昭和44年4月ラストボロフ事件・総括』

「中尾は終戦当時北支派遣軍情報部に属しロシア人工作を担当していたが、終戦後北京でソ連から働きかけをうけて協力と忠誠を誓約し昭和 23 年 4 月引揚げた。翌年 4 月厚生省引揚援護局に奉職したがそのころ何者かに身边を監視されているような気がして恐ろしくなり在日ソ連代表部を訪ね、以来コンスタンチーフやサベリエフ書記官と該当連絡し、板垣、荒木元大将ら 20 数名の個人資料を提報していた。」

「暗号名“ソム”は戦時中、中国で O・S・S(戦略業務局)の下に働いていたが、終戦後ソ連工作員に獲得された」

→・RG319 ラストボロフファイルにも同様の記述

・但し、RG226 OSS Personal Files のカタログには中尾将就の名前は見つからず

・RG319 ラストボロフファイル

- ・中尾将就がソ連代表部のために荒木貞夫の息子(ARAKI Morio)の住所を調べ報告
- ・ARAKI Morio はソ連側から接触を受けている
- ・ARAKI Morio は Project STITCH の下で尋問を受けており、本部にある完全なファイルを用いることができる とある

→・RG319 個人ファイルには ARAKI Morio の名前は確認できず

・同様のケースに松岡洋右の息子(MATSUOKA Shinzo)

- ・RG319 ラストボロフファイルには、MATSUOKA Shinzo がソ連にリクルートされた可能性があること、及び、MATSUOKA Shinzo の Project STITCH ファイルが存在するとあるが、RG319 個人ファイルには MATSUOKA Shinzo の名前は確認できず

C f. 泉顕蔵

→RG319 ラストボロフファイル

- ・泉(コードネーム：ネロ)がソ連エージェントであると自白したこと、及び、泉の尋問・自白が Counter Espionage Branch files にあるとしている

→RG319 個人ファイルには泉の名前は確認できず

→警視庁公安部『外事警察資料昭和 44 年 4 月ラストボロフ事件・総括』にある、「暗号名“ネロ”がプラハの日本大使館にいた時(日・独・伊)三国同盟があり、ソ連側にとって“ネロ”の存在は重要であった。というのは、彼はベリヤが直接使っていたエージェントであり、しかも三国同盟会談でマツオカ(注、松岡洋右外相)が提出した書類は彼が準備したものであった。彼がエージェントとなった経緯はモスクワ在勤中結婚したロシア人の妹がソ連に人質となったことからである。」に関する記述は、ラストボロフ供述によって得られたものと思われるが当該記述は RG319 ラストボロフファイルでは確認できず

→Hiroaki Kuromiya, “Kōzō Izumi and the Soviet Breach of Imperial Japanese Diplomatic Codes” *Intelligence and National Security* Volume

⑦淡徳三郎

- ・RG319 個人ファイルあり
  - ・警視庁公安部『外事警察資料昭和 44 年 4 月ラストボロフ事件・総括』には 3 ページのみ
  - ・RG319 淡徳三郎ファイル
    - ・日本の警視庁はラストボロフ事件に関して淡徳三郎について捜査しようとしていない
    - ・その理由として、淡が公然の日共黨員であることをあげている
    - ・また、ラストボロフが淡をソ連代表部のエージェントと供述している根拠は、モスクワのソ連内務省本部でファイルの中に淡の写真を見たことがあることにのみ基づいている
  - ・RG319 ラストボロフファイルでは、Nosenko が扱っているエージェントであると指摘
  - ・一方で、淡徳三郎に対する CIC の監視は 1948 年 8 月 30 日から開始(淡の帰国は 1948 年 8 月 12 日)
  - ・CCD による淡の私信の検閲(intercept) : 1948 年 9 月 4 日-10 月 6 日
  - ・淡徳三郎『三つの敗戦』 時事通信社、1948 年 及び 淡徳三郎が編集した 『増刊 平和 朝鮮戦争の真相』 青木書店 1952 年第 5 号 の現物と英訳
  - ・1948 年 8 月 20-9 月 3 日までの CIC の淡に対する関心事項
    - ①日本共産党の黨員、エージェント、指導者たちとどのような接触を行っているか
    - ②野坂フラクションや徳田フラクションのような日本共産党の特定のフラクションとつながりのある証拠があるかどうか
    - ③淡は極東コミンフォルムからの指示を受けているかどうか
- ←柴山太『日本再軍備への道 1945～1954 年』 ミネルヴァ書房、2010 年
- ・CIC は 1947 年 11 月 20 日から 12 月初めまでハルビンで極東版コミンフォルムの設立準備会議が開かれていたという情報を入手
  - ・G-2 は日本共産党中央執行委員会の秘密会議議事録を入手し、代表派遣を求める野坂派と、派遣反対派の徳田派が激論を交わしていた

⑧日本共産党 (ロン)

- ・RG319 ラストボロフファイル
- ・1950 年までは、日本共産党との連絡はソ連代表部の軍事グループ (GRU) が行っていた
- ・1950 年に、ソ連内務省が各国共産党との連絡を引き継ぐようにと命令がなされた
- ・現在は、ソ連代表部の Nosenko が日本共産党との連絡を扱っている
- ・ソ連代表部は、日本共産党に対し日本国内でアメリカドルを与える形で援助していた
- ・日本共産党に資金を運んだのは、コードネーム : ロンという人物である
- ・ラストボロフによれば、日本共産党は以下の財政的援助をソ連代表部から受けていた

1952年夏：300000ドル

1953年4月頃：15000ドル及び日本の映画会社からの日本円がこれに含まれる

1953年9月：150000ドル

- ・ロンはインテリジェンス情報のチャンネルとしても機能していた。ロンを通してもたらされた情報の中には、吉田ダレス交渉に関する文書も含まれており、ラストボロフによるとこの情報は極めて貴重であった

→警視庁公安部『外事警察資料昭和44年4月ラストボロフ事件・総括』には、このロンを日共トラック部隊長の大村英之助としている。日本側山本課長が人定捜査のために訪米した際、ラストボロフ自身が大村英之助の写真を選び断定したという。

RG319個人ファイルには、大村英之助の個人ファイルは確認できず、また、ラストボロフファイル中にも大村英之助の名前は確認できなかった。

### (3)おわりに(今後の課題を含めて)

- ・アメリカ側ダブルエージェントとしての囲い込みとアメリカ側エージェントとしての活動は日本側に伝達されていない
- ・戦後のラストボロフ関係者(シベリア抑留エージェント)に関する公安調査庁の監視・調査のアメリカ側への報告

→共産圏の対日工作に対する対米従属という枠内での協力関係

- ・ISHIDO Sukemitsu、沢田孝夫に関する記述が警視庁公安部『外事警察資料昭和44年4月ラストボロフ事件・総括』から抜け落ちている
- ・アメリカ側にあるはずのRG319個人ファイルで公開されていないラストボロフ事件容疑者のファイルの問題
- ・イギリス側関連史料の有無の調査の必要
- ・官房調査室及び外郭団体への浸透とインテリジェンス機関創設への影響

### (4)史料・参考文献リスト

#### 文献

#### 一次史料

警視庁公安部『外事警察資料昭和44年4月ラストボロフ事件・総括』

#### 二次文献

ピーター・ライト(久保田誠一監訳)『スパイキャッチャー』朝日新聞社、1987年

柴山太『日本再軍備への道 1945～1954年』ミネルヴァ書房、2010年

C・A・ウィロビー『知られざる日本占領—ウィロビー回顧録—』番町書房、1973年

高山信武『服部卓四郎と辻政信』芙蓉書房、1980年



Hiroaki Kuromiya, “Kōzō Izumi and the Soviet Breach of Imperial Japanese Diplomatic Codes” *Intelligence and National Security* Volume 28, 2013

淡徳三郎 『三つの敗戦』 時事通信社、1948 年

文書館史料(一次史料)

Folder RASTVOROV Yuriy A., Box627, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder SHOJI Hroshi, Box722, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder HIGURASHI Nibunori, Box289, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder TAMURA Toshio, Box776, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder SHII Masaji, Box716, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder HOSOKAWA Naonori, Box315, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder KORI Kikuo, Box425, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder HIRASHIMA Ichiro, Box291, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder TOKUSABURO Dan, Box798, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder ASAEDA Shigeharu, Box23, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder YOSHINO Matsuo, Box877, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder YANAGIDA Hidetake, Box871, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder TAKIYANAGI Seiichi, Box774, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder NORIO Sawada, Box567, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder SHIGERU Takamore, Box716, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder SAKATA Jiro, Box659, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder OSUMI Michiharu, Box588, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder TANEMURA Sako, Box777, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

Folder ABE Koichi, Box1, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II